

Yと、インカレ運営に携わる全ての人々へ・・・

テクニカル・アドバイザー 村越 真

木曾路はすべて山の中である。山の中だから寒い。とりわけ1、2月の寒さは厳しい。その寒さの中で、一人で村の旅館に泊まりながら地図調査をすることは、強靱な精神力を要求していた。さしものYにも疲れの色が見えていた。「地図調査に入ってくれ」。Tのもとにそんな電話が入ったのは、1月も末だった。3月のインカレまであと1月半。調査は1/4も終わっていないという。その夜のうちに荷物をまとめると、Tは会社に電話を一本入れ、翌日からの有給を告げた。

駅についたTをYが迎える。現地に向かう車の中で、Tは手短かにテラインについての説明をきく。テラインの様子を語るYの顔に浮かぶ焦りの表情を彼は見逃さなかった。彼は頭の中で調査の手順を手際よく組み立てていた。

Tの頭に、中学のころ読んだ漫画が浮かぶ。ヘリコプターからブラック・ジャックが降りる。状況を説明しようとする依頼主の言葉を遮って、彼は患者のもとに急ぐ。「だいたいのことは飛行機の中で読んで来たよ。一刻を争うんだろう？」信じられないようなスピードで手術を済ませると、巨額の治療費を請求し、何事も無かったように帰ってゆく。その世界に憧れた彼は、好んでこんな空想をした。人里離れて一人で住んでいる彼のもとに、間近に迫った大会の主催者が現れる。「どうしてもあなたの力が必要なのですが・・・。」彼は依頼を受け、現地に赴く。信じられないようなスピードで地図調査を終え、何事もなかったように帰ってゆく。中学生のころの空想が、こんな形で実現するなんて・・・。彼は苦笑した。現地に着くと休む間も惜しんで彼は雪の残る山の中へと入っていった。

しかし、現実空想のようにはうまく進まない。その日の夕方、Tは疲れきって宿に戻ってきた。テラインは予想以上に手ごわい。その彼にYは語る。「おまえがここにいると思うだけで、今日は我慢できたぜ。」孤独な作業でも、同じ山の中に目的を同じくしている仲間が居る。Yが本当に必要としていたのは、そういう実感だったのかもしれない。

帰りの新幹線の中で、私はTと一緒にになった。「僕はしんのいうように、マッパーとランナーの戦いというのは考えていない。しんはなぜコーチしてるの？選手たちがよりよいレースができるようにだろう。僕は、正確な地図を作ることで、ランナーたちによりよい舞台を提供している。僕がしていることは、しんがコーチをしていることと同じなのだ。」私の気分は、ちょっとハイになった。

次の週に作業現場に出向いた私は、二人の作業に立ち会う。「違う！このコンターは少し下げおかないと・・・」「この地形は悩ましいぜ。」「おめえの境界線調査はでたらめだぜ。

おかげで今日一日ミラクル・ワールドだ。」「ゲゲゲ!」「ほれ、これでピッタリあうだろう。」「ウーン、さすがプロの仕事。」ぶつぶつぶやきながらそれぞれの仕事に没頭し、時折会話が成立する。

その光景を見て、あれっと思った。夕食時にTに疑問をぶつける。「T、本当にほんとうに『学生のため』、『インカレのため』って思って作業してる? そうは思えないな。」「どういうこと?」「Yの仕事ぶりを見ているとね、期日に間に合わせようという気持ちが全然伝わってこないんだ。誤解しないで、批判しているんじゃない。本当に『そのために』、つまり明確な目標意識がある時って、なにか切羽詰まった、『これやらなきゃ』っている一種のゆとりのなさみたいなのがあるじゃない。特にY見るとそんな感じがしないんですよ。難しい特徴物の地帯が出てきたりすると、それって本当は仕事の計画通りの進行からすると大問題なんだけど、口ではそういいながらも、そのトラブルを楽しんでいるって感じがする。『・・・のために』って意識が強すぎたら、絶対そんな『遊び気分』じゃ、調査できないと思うな。」

Tのきつい顔がちょっと緩んで、彼はこう答えた。「昼飯時って、少し落ちついて休憩するでしょ。その時いろいろ考えるの。このくそ忙しいのに、何で恵那の山の中にいるんだって。確かに最初は『学生のため』って思ってた。でもそれは自分の行為を一定の方向に向けるための口実に過ぎないような気がしてきたんだ。みながパチンコや麻雀とか、仲間との会話に没頭するだろう、それに近いものがあるな。それが何の役に立つってのは、実際山の中に入っている時にはほとんどないね。時には、知り合いの学生が走っている姿をイメージすることもあるけどさ。そう、ひょっとすると、禅とかの修行ってこんなものじゃないかと思う時もあるよね。そんな気しない?」

修行という言葉には共感を覚えた。目的なしに困難な行為を持続させることは難しい。しかし行為に社会的な目的を設ければ、その目的が、自分を、そして他人を拘束する。自分は目的を達成しなければならないという義務感によって、他人はその目的を到達する手段、あるいはそれまでにして達成された目的に恩義を要求することによって。修行とは、目的の持つ、相反する機能をうまく調整するための宗教的な知恵だったのかもしれない。

「遊ばせてやれよ」「遊び?」「そう、遊び。しんの立場からすれば、期日通りに地図を仕上げたほしいって気持ちはあるだろう。でもこんなこと、仕事気分じゃ、気が滅入っちゃうね。奴にとっては、難しくて手間のかかるエリアも、どれだけ期日ぎりぎりに仕上げることができるかもゲームなんだよ。奴は、周りからみればずいぶんふざけた行動をとることで、内心こう言っているんだ。『さあ、俺と一緒にゲームを楽しもう。君たちが参加しなければゲームが始まらないじゃないか』って。」